Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-27

近代神戸の風景 : レファート写真コレクション（時評・書評・展示評）

木村, 修二

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,4:86-90

(Issue Date)
2012-08

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81004256

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004256

KOBE UNIVERSITY

時評・書評・展示評

Current Topics & Reviews

近代神戸の風景——レファート写真コレクション

木村　修二

神戸市文書館主催の平成二三年度企画展「近代神戸の風景——レファート写真コレクション」（以下「本展」）は、二〇一一年一〇月三日より同二一日までの一九日間にわたって、同館において開催された。本展は、同館と神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが協同して準備が進められている。これまで両者協同による展示会としては、『新修神戸市史』の編纂過程で見出された古文書を展示した「中世石峯寺の古文書と出土品」（二〇〇六年度）や、「神戸の中世再発見」（二〇〇八年度）、館蔵資料の公開・普及を目的とした企画展「井上善右衛門家文書展」（二〇〇八年度）などが開催されてきている。

さて本展は、明治三八年（一九〇五）にドイツから来日したオットー・レファート氏が撮影ないし収集した写真や絵葉書が、オットー氏の次男であるヴァルター・レファート氏によって同館に寄贈されており、これを公開することが目的と察せられる。

本稿は、本展の概観とともに展示を観覧しての感想を中心に述べる。なお、本展に出展した各写真や展示のコンセプトについては、当日配布されたパンフレット、および展示作業に携わられた吉原大志氏により解説されているので[1]、詳細はそちらに譲る。

＊

本展の構成は、主に三つに分けられる。第一は、写真現物をデジタル化したものを引き延ばし、プリントしたものを展



近代神戸の風景
レファート写真コレクション

会期　2011年10月3日～21日
会場　神戸市文書館
主催　神戸市文書館
協力　神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター

示ケースに陳列したもの。第二に、デジタル画像をプロジェクターでスライド上映するコーナー。第三に、展示品に即して立てられたテーマをパネルで解説し、館内の壁に掲示したものである。

吉原氏によれば、レファート・コレクションは、神戸市立博物館にも同家より寄贈された分があり、さらに現在のレファート家にもまだ残されている写真がある模様である[2]。写真は、全点にわたってデジタル化がなされているものと思われるが、デジタル化によって、分割されたコレクションの全容をデータで共有することもでき、こうした展示での活用も可能となるのである。

さて、まず展示ケースでの展示については、三つのケースで合計一五枚の写真が展示されていた。写真は、大正期から昭和の戦前期にかけてのいずれもまことに貴重なもので、常日頃から古写真に凄味や郷愁を感じてやまない私には、どれも興味深いものばかりであった。とりわけ関心をひいたのは、北野の異人館を遠望した一枚である（②「北野」）。現在の神戸市中央区山本通一丁目付近から北方をやや仰ぐ形で撮影されたもので、ビルなどが増えた今では撮りえない景観であるとともに、もはや失われた異人館が多く写っているのが極め



て貴重である。現存する「ラインの館」（旧ドレウェル邸、大正四年建築）が見えることと、角度的に写っていてもおかしくない「うろこの家」（旧ハリヤー邸、大正一一年旧居留地より移築）が見えないことから、大正四年（一九一五）から同一一年（一九二二）の間に撮されたものと推測される。なお、⑩「六甲ケーブル」と題されていた写真（絵葉書？）は、摩耶ケーブルの誤りである。

ただ、コレクションの中から展示品を厳選せざるをえなかったものと推察されるが、恐らく総数はかなりの枚数にのぼると思われるので、展示数が一五点にとどまったのはやはり残念であったが、展示スペースの関係でこれもやむをえないだろう。さらに言えば、今回は写真の現物を展示したものではなく、あくまでデジタル画像をプリントした複製物が展示に供されていたので、どうせなら視点の遠くなる展示ケースではなく、可能な限り大きくプリントするとともに、できるだけ近づいて写真をみることができるようなパネル展示でも良かったかもしれない。

展示品数の少なさをクリアーすべく考え出されたのが、恐らくスライドショーと思われる。決して広いとは言えない閲覧室の中でなんとかスクリーンと座席を数席分を置ける場所を確保され、一定時間毎に上映されていた。こうした企画が可能となったのもデジタル化によるメリットと言えるが、いささか残念だったのは、多くの写真がほとんど秩序立てられずにスライドされているうえ、デフォルトでキャプション記載のある絵葉書以外に、写真毎のキャプションなども画像になかったので、どこを撮影した写真であるかがにわかにはわからなかったことである。その点への対応だろうが、館のスタッフがスクリーン前に立たれて解説をされていた。ただ、これも自動スライドショーだったため、その写真について話されている間に、画面は次の写真に移っていて、若干混乱をきたしていたのは残念だった。あるいは、急遽準備されたコーナーだったのかもしれないが、スライドに載せる画像の数をもう少し絞ってでも、一手間かけて画像の隅にキャプションを付けるとともに、体系的なテーマ性に沿ったものであればよかったのにと惜しまれる。

パネル展示では、四枚の解説パネルと一枚の関係地図が、閲覧室の壁に掲げられていた。一枚目は、「レファート家略年譜」と題されたもので、オットー・レファート氏の来日（一九〇五年）からヴァルター・レファート氏が海岸通で会社経営を行うまでを、写真とともに一覧化したものである。

このパネルの製作に当たった吉原大志氏によれば準備過程で二度にわたってヴァルター氏への聞き取り調査を行ったという。日本の同盟国のドイツ人だったレファート一家は、戦時中も日本に滞在し続けることができたが、それでもヴァルター氏の二歳年上の兄ハンス氏（一九四九年死去）が昭和二〇年（一九四五）にスパイ容疑で拘束されるなど、外国人ゆえの波乱の歴史を送ってきたことがわかって興味深いものがあった。二枚目以降は、今回展示された写真に関連するテーマをまとめたパネルである（実際には、今回の展示写真は、以下のテーマに即して選ばれたのだろう）。テーマは、二枚目が「神戸の居留地と外国人」、三枚目が「商店街・百貨店のにぎわい」、四枚目が「鉄道網の広がりと郊外レジャー」というものである。私に内容について批判する能力はなく、むしろ大いに勉強になるばかりだったが、欲をいえばレファート家を含む在日ドイツ人の動向が詳しくわかるようなパネル解説があれば、戦前神戸の外国人社会におけるドイツ人の位置が照射できたのでないかと思われるが、その点を含めてテーマのバリエーションについては今後にさらに期待したい。

＊

本展は、『神戸新聞』や『読売新聞』、『産経新聞』に記事が掲載されたこともあってか、期間中に一二二八名もの観覧者を得たとのことである。[3] 博物館施設ではない機関が行った展示会としては、かなり多い観覧者数といえるのではないかと思われるが、それはやはり昔の神戸を写した古写真という素材に、市民が並々ならぬ関心を寄せていることの顕れであると考えられる。戦後日本の景観は、都市や郊外、地方を問わず劇的に変化した。一人の人間の生涯の内に経験・見聞しうる変化としては、これほどの激変を迎えた時代も他にないのではないかと思われる。しかしその激変も日常生活のレベルでの時間軸においては、ほとんど変化が認識されずに、時だけが進んでいるように感じられるのでないかと思われるが、それだけに今昔の景観の記憶を持っている年配が、こうした古写真をみるとその変化に改めて気づかされるとともに、懐かしさも覚えるということになるのだろう。また、過去を知らない若い人々においては、見知らぬ過去の風景を古写真の中にのみ見ることができるのである。

戦災やたびたびの災害に見舞われた神戸は、とりわけ景観の変化が激しかった地域である。よって、失われた古い神戸の風景が記録された古写真は一枚でも多くあることが望まれる。今回、多くのレファート古写真コレクションが館に寄贈



され神戸市民の共有に帰したこと、さらに本展によって、その一部を直接目にすることができたことに対し、関係者の労を多としたい。

展示方法の工夫や展示スペースなどに課題があったとはいえ、多くの史料を所蔵する神戸市文書館が、館蔵史料の公開をなんとか進めようとする姿勢には率直に敬意を表したい。この上は、所蔵史料のうち閲覧可能な物件をできるかぎり増やすとともに、今回のような生の資料を観覧できる機会を多く設けていただくことを願いつつ、擱筆したい。

（二〇一一年一〇月四日観覧）

註

（1）吉原大志「近代神戸の風景――レファート写真コレクション」（『海港都市研究』七、二〇一二年）。

（2）吉原氏前掲註（1）論文四〇頁所収の展示使用写真一覧による。

（3）『歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業報告書（一〇）』（神戸大学大学院人文学研究科、二〇一二年）。